

(翻訳) ノーマン・ホームズ・ピアソン
アメリカ文学史19世紀

鈴木敦巳・日夏隆

19 世 紀

19世紀になると、アメリカの作家たちは、新国を創設するのだという必然的課題から自らを解放し始めた。フランクリンは書いている。「総てのことには、時があり、若者を担う新国には彼らの空想力を、判断力を強めるために強化する義務がある。…アメリカには、一人の校長がゲーダースの詩人に匹敵し、一つの機械や用具の改良がラファエロの傑作より価値をもつ。国家は、貧しきリチャードが富への道を探り始めたのと同じだとフランクリンは、感じていた。ワシントン将軍も同意していた。「当分の間は実用的な学問のみを重んじるべきだ」と言い、想像的なものより科学的なものにこの国の才能を結集させる方策を見つける方がたやすいと付け加えている。当時、文学の独立にはアメリカで書くためのフランチャイズを確保する必要があった。

ワシントン・アーヴィング 最初の文学者

このような環境のもとでの創造的精神の不安をよく表しているのがワシントン・アーヴィングの経歴である。最期はカーク・ポールディング(1778-1860)、ジョセフ・ロードマン・ドレイク(1795-1820)やフィッグリーン・ヘリック(1790-1867)などのニューヨークのグループ、ニッカボッカーの最も偉大な作家となり、青春の長い時期、ディレタントの趣味を幾分かでも満足させる職業を手探りでさがした。しかし、アーヴィングの天分が発揮されたのは、兄弟であるポールディングと共に労した風刺的な随筆『サルマガンディ』(1807-08)と『ディートリッヒニッカボッカによる…ニューヨーク史』(1890)というバーレスク(笑劇)によってであった。1815年から17年海外で自由な生活をし、ヨーロッパの過去のロマンティックな探求者として名をなした。外交的な職についていた時期を除いて、アーヴィングは執筆によってのみ生計をたてており、これはアメリカ人作家にとって新しい身分であった。ロード・バイロン、サー・ウォルター・スコット、サミュエル・テイラー・コウルリッジやウィリアム・ゴドウィンが純文学の分野におけるこの最初のアメリカ人を歓呼して迎えた人々である。彼の主題はアメリカのものというよりは自分達と同じ大西洋側から引き出されたものであることが顕著であったので、彼を異質の作家と見なすことはなかった。

『スケッチブック』の序にアーヴィングは書いている。「自国のあちこちを訪れたが単に美しい

風景を愛するにとどまった。きっとどこか別の所に満足を求めていたのにちがいない。…一方ヨーロッパは物語風で詩的な魅力を差し出していた。芸術的傑作や高度に文化的な社会上品さ、古風で趣のある古代の地方の慣習。故郷は希望で溢れているが、ヨーロッパは歴史的な宝物に富んでいる。

城や苔むした遺跡、同類のロマンティックな惜緒を掻き立てる刺激のないことへの欠如感が新たな文学を創造せずにはおかなかった。自らの感傷的なイギリス体験をもとにした『ブレースブリッジ邸』(1822)や、グラナダ訪問から引き出した『アルハンブラ』(1832)でさらなる名声を得、そして『クリストファー・コロンブスの生涯と航海の歴史』(1828)でオックスフォードから称号を得た。しかしなんといっても今日の彼の名声は『リップ・ヴァン・ウインクル』(1819)や『眠りが穴の伝説』(1820)などの数少ないアメリカの物語によるものである。前者はドイツの物語をキャットスキル マウンテンに移しリップをアメリカの自然人に変えアメリカ化したものである。

ジェームズ・フェニモア・クーパー

国内外におけるジェームズ・フェニモア・クーパーの衝撃的、永続的な名声はアーヴィングに勝るものだろう。クーパーは最初のアメリカ作家ではなかった、アメリカ第一の小説はウィリアム・ブラウンの『憐みのか』(1789)であった。その後クーパーの『スパイ』出版まで多くの作家たちはこの次第に興をそそる文学的表現に手をつけた、チャールズ・ブロックデン・ブラウン(1771-1810)のゴシック小説はアメリカのみならずイギリスにおいてもある程度の注目を得た。彼の『ウィーランド』(1789),『アーサーマーヴィン』(1799-1800),そして『エドガー・ハントリ』(1799)は心理的、扇情的文体とアメリカの題材を用いた大胆な試みであったが、性急すぎたため、洗練さを欠き、当を得た伝統の無さを露呈した。ヒュー・ヘンリー・ブラッケンリッジ(1748-1816)による『現代騎士道』(1792-1816)は、ブラウンのどの作品より優れた内容である。無骨なアメリカ人のビカレスク風の生活描写はプロットによるよりは民主主義を実践したいという作者の生来の訴願により結合されている。

クーパー自身もまた民主主義の忠実な批評家であり、アメリカの作者の特徴となった自己批判の自由を助長したが、子供を良くしたいという誇り高い親の願い、反対に親を良くしたいという子供の願いを理解しない国外の読者たちを常に驚かすもとであった。多数決に対抗する保守派の視点からの解説『アメリカの民主主義者』(1838)で展開されている見解は小説では『猿まね』(1835),『家路』(1838)や『故国見たまま』(1838)などの作品に反映されている。しかし海洋小説の達人として名を馳せはじめたのは、アメリカの独立戦争小説である『スパイ』や『水先案内』(1823)などで取り組んだ題材によってであり、『皮革脚絆物語』で確固たる名声を確立した。『開拓者』(1823),『モヒカン族最後の者』(1826),『大草原』(1827),『鹿猟師』(1841)でナッティ・バンボーという自然と協調し、自然を征服する徳を椎ね備えた文学上の英雄を作り出した。革脚絆物語やその他の偉業はあらゆるヨーロッパの国に知られ、彼は「自然に反対する」あるいは「理

性に反対する」あらゆるものに立ち向かう自然人を代表するようになった。

彼が徘徊する森の豊かな風景は何世紀にも渡ってヨーロッパの人々に、フランス人が「アメリカの事柄」と呼んだものを植え付けた。クーパーはまたアメリカにおいてロマンティックな開拓者精神と開拓者を発掘するのに貢献し、彼の功績によりアメリカ文学は間違いなく独自の衣装を、いつも、しか皮をはかないが、纏い始めたと言える。

ウィリアム・カレン・ブライアント(1794-1878)。

自然や今日における人の自然とのかかわりへの哲学的考察による失われた過去への郷愁というもの、特に詩人が研ぎ澄まされた感性で理解し、表現するにたけ、アメリカの詩人にとっては特に手じかな題材であったが、それに代わって次第にワーズワース等のイギリスの詩人の詩がアメリカの文学的意識の中に入ってきた。ジョゼフ・ロードマン・ドレイクやフィッツグリーン・ヘレック等の叙情的詩句はしばしば魅力的であった。しかしアメリカ詩の本有的な新生はウィリアム・カレン・ブライアントに始まった。彼の言葉によると彼はワーズワースの『リリカル・バラッド』を読んで「幾千もの泉が私の心に一度に沸きいで、自然の顔が突然命の新鮮さに変貌した。」このような新しい刺激から『水鳥に寄せて』(1815年書く)と『リンドウに寄す』(1829年書く)といった今なお高く評価されている詩が生まれた。

あなたの甘い穏やかな瞳が
空を突き抜けて見抜いた
青いー青いーあたかも空が
花を空色の壁から落とすかのように

他の詩において一彼の長い生涯の詩の産物を考慮に入れて一エドワード・テイラーが知られていない時点で彼はアメリカ文学に始めてレベルの高い詩を出版したのみではなく、卓越した、もっと言えば特異な役割を果たしたと言える。ブライアントの言によると、詩は創造性に訴えなければならぬが、「ある程度まで無意識の領域のことを考えるとさらに高次の価値をもつ。」「詩が人の思いと情熱を支配し、それが詩の社会の徳と福祉への最重要な意義となる。我々の感性に訴える総てのものは我々にとって道徳的教育である。」後半の道徳的教育という観点からブライアントをしてかくも多くの道徳的教訓をその詩に付けさせることとなり、詩それ自体よりも教訓をブライアントの詩から引き出すということになった。ブライアントはアメリカ詩に威厳を与えたが、校長のように詩を仕立ててしまった。

エドガー・アラン・ポー

ブライアントは社会に適合したが、エドガー・アラン・ポーはそうではなかった。ロマンティック・ヒーローは、偉大な指導者になれなかった時、仲間からの隔絶を認識する。ポーは疎外の苦悩

を著作に表した。ブライアントがその詩の題材を彼の身近の自然から引き出したのに対して、ポーは18世紀のイギリス文学のゴシック風の装飾からより自己の世界に近いものを紡ぎ出した。自然より、人が夜の闇の中に一人さまよう、超自然を、朽ちかけた死体の一つ、がちゃと鳴る重い鎖、猛る嵐を。『海の中の町』(1831)、『不安の谷』(1831)、『幽霊城』(1839)等は典型的な彼のセッティングであり、彼の詩の登場人物は『眠れる人』(1831)であり、『ユーラルーム』(1848)であり、『レノール』(1831)、『イズラフェル』(1831)であった。彼の風変わりな空想は、時に単調な韻律よりもチャールズ・ボードレールやステファン・マラルメなどの偉大なフランス詩人たちの関心を集め、彼らを通して、ポーは現代詩にシンボルを用いるという大きな影響を行使した。こうしてポーは自国以外で大きな評価を得た初めての詩人となった。

ポーはまたアメリカ文学の最初の批評家としても名をなした。ブライアントのように創造力を恐れるのではなく、ポーは、それをつかみ、愛した、詩に寄せる思いと等しい思いを小説に傾けた。『アッシャー家の崩壊』(1840)や『アモンティラードの樽』(1846)、『物をいう心臓』(1843)等の一連の優れた短編小説において、ブラウンなどの作家が紹介した心理的扇情主義を最大限に駆使した。

しかしアメリカ小説における彼の貢献は、何と云っても独自の技巧で賞徹した探偵小説を切り開いたことである。『盗まれた手紙』(1845)や『モルグ街の殺人』(1841)は彼の‘tale of rati onnati on’の好例である。シャーロック・ホームズはポーの卓越した素人探偵デュパンの文学上の息子である。

ニューイングランド ルネッサンス

ニューイングランドの文学は「コネティカット賢人」の模倣を除いてジョナサン・エドワーズの時代より休憩していたように見える。19世紀の第二半世紀には、ニューイングランドは文学的卓越性を取り戻した。多くの要因が考えられる。ユニタリアニズムが育成したりベラルな運動、ハーヴァード大学の発展、ヨーロッパの知的、哲学的潮流を覚醒の受容、そして経済的拡張からくる活力、これら総てがニューイングランドの作家達の血を躍らせ自信をもたせた。

ラルフ・ウォルドー・エマソン(1803-1882)。

ラルフ・ウォルドー・エマソンは真のニューイングランド人であった。彼は7代目の牧師であった。兄弟たちと同様、エマソンはハーヴァードに進み、1821年に卒業したのち、しばらく女学校で教え、ハーヴァードの神学部に入った。1829年ボストン教会の牧師となるが、「人は、直接自然と自身の魂を通して神を知ることができるのではないか？」との信念に、「人と無関係の非難所」として教会を去った。29才のとき三回のうち初めての洋行を果たしたが、ヴェニスを単に「ビーバーのための都市」と評した。彼はウォルター・サヴェジ・ランドールとイタリアで会い、コウルリッジとワーズワス、そして、とりわけ、彼の生涯で初めての親友となったトーマス・カーライルと

イギリスで会った。場所ではなく人が彼の目標であった。しかし人を見いだしたにもかかわらず、彼は「自分自身に戻る喜び」に返った。「魂は旅人ではない、賢人は家庭に留まる。」と書いている。「日は今日も照る。」コンコードでも彼に日は照った。「汝自身を信ぜよ」と「総ての心がその鉄線に振るえる」貧しきリチャードの金句を精神的に高めた警句的な調子で書いている。『自然』(1836), 『アメリカの学者』(1837), 『神学部演説』(1838), や『エッセイ集・第一集』(1841), 『エッセイ集・第二集』(1844)等は、彼の自己信頼のメッセージを伝えている。

彼が探していたのは人間と宇宙の本来の関係である。コットン・マザーは、一世紀前ボストンの街を歩いて、「主よここに何が見えるでしょう？」と目にする総ての物について尋ねた。ある種の自然現象がある種の精神的事実とし自然を精神の象徴とした時、超絶化したもののエマソンは彼の受け継いできたものを示したのにすぎない。言葉は自然的事実と主張した時この超絶主義を文学に持ち込んだのだ。このような変遷を経て、ありふれたものが神聖なものとなり、総ての著作が自然界の事実を含んでいるが故に、精神界の象徴となることができる。エマソンの教えは、言葉と物との歴史的対立を打ち破った。「私に健康と日を与えよ。そうすれば、私は皇帝の華麗さを笑いものにしよう。」同様に彼は退屈な修辞を、笑いものにしよう。

詩を書く者として、自身の『詩人』(1844)において、「韻律ではなく、韻律法の議論が詩を作る、一植物や動物の魂のような、かくも情熱的で生き生きした考えが詩の創作者であり、新奇なもので自然を飾る。」彼はアメリカの詩人たちに熱烈に望んだ「我々の比類なき素材の価値を知る事を。。。我々の丸太転がし、切り株と彼らの政治、我々の漁業、我々の黒人たち、悪党の激怒、真面目な人々の無気力さ、北方の商売、南部の農耕、西部の開拓、オレゴンやテキサスは未だ詩に読まれていない。しかしアメリカは我々の目には詩であり、その広大な地理は創造力を眩惑し、詩となることを待っている」と。彼は高まる愛国主義を訴えているのではない。創造力の可能性を訴えているのだ。聞きなさい。ウォルト・ホイットマンが完璧な答えを与えている。

ヘンリー・デイヴィッド・ソロー(1817-1862)。エマソンが手を延ばせば届く所に聴取者はいた。ヘンリー・デビッド・ソローがその人で、有名なコンコード派の中で唯一地元で生まれた。ハーヴァードを卒業したが、卒業証書の為に一ドルたりとも払わなかった。「羊に自身の皮を維持させよ」彼は自然にエマソンの弟子となった。『コンコード川とメリマック川での一週間』(1849)と『ウォールデン、森の生活』(1854)においてソローは、独目のエマソン流自然との関係を切り開いた。第一の書物は来る日も来る日も、兄弟とカヌーの旅に明け暮れた中での人生と文学に対する雑多な観察でいっぱいである。第二の書物は、物質的繁栄を強調する余り、アメリカが混乱し、無力になったかを示すために彼がウォールデン池の端で行った有名な生活の実験である。「私が森に行ったのは」とソローは書いている。「慎重に生き、生の本質的事実とだけ直面し、人生が教えるべきことのみを学んだかどうかを知り、死ぬ時がきて、本当には生きてこなかったと気付くことがないようにしたかったからだ。人生はそれほどいとおしいもの。」結果として、

偉大なアメリカの古典が誕生した。本が卓越しているように麗しい自然と人に対する愛に満ちた人間存在の小宇宙のような住まいの描写である。ソローは『市民の不服従』(1849)において、彼の個人の尊厳に対する頑固なまでの感性を政治に持ち込んだ。その影響は20世紀にマハトマ・ガンジーがインドにおいて非暴力の抵抗運動のモデルとして採用した時、一世を風靡したことから明らかであろう。

同時代における彼の詩人としての目をみはる独自性は、今では、彼の書類の山にしまいこまれた詩の文句によってのみ知られる。彼の名声はこのようなヤンキーの詩から芽生える。

洞穴は兎に占領され、
はねつるべは傾いていても、
家は人気なく、
幽霊が出る。

ケンブリッジ派の詩人たち。

ヘンリー・ワズワース・ロングフェロー(1807-1882)、オリヴァ・ウェンデル・ホームズ(1809-1894)、そしてジェームズ・ラッセル・ローウェル(1819-1891)の生涯は安らかに営まれた。彼らの掲げた灯は、ソローやポーよりもはるかに暖かく輝き、彼らは大衆の支持する時代の代表的な声を放った。どのような基準から見ても、ロングフェローの功績は『Paul Revere's Ride』(1863)、『マイルズ・スタンディッシュの求婚』(1858)、『エヴァンジェリンA Tale of A cadie』(1847)、や『ハイアワサ』(1855)などで彼がアメリカに与えた英雄である。ロングフェローは歴史のほんの一端から彼らを編み出したのだが、彼と彼らの名はアメリカと同様、国外でも人の良く知る名前となった。ロングフェローは旧世界との両面交通の道を切り開いた。ヨーロッパの書物に精通していたために、他の彼の時代のどの詩人よりも彼はアメリカ文学を豊かにすることに貢献した。高名な言語学者として、またハーヴァードの現代言語のスミス教授として、多くの外国の詩を翻訳しただけでなく、それらの長所をアメリカ詩に取り入れた。ロングフェローは批評家が読み直してみるべき詩人である。彼の詩の多くが感傷から免れ、ランクの高い専門用語を用いていることを発見することだろう。

ホームズにおいて国家は初めてのプロの「社会派詩人」を得た。ほとんどどの宴会も会議もしゃれて表した小看板「歓喜で迎えられる」の機知のきいた博士の詩で飾られた。ホームズはまた一般のアメリカ人にとって、「アトラティック・マンスリー」誌に寄せた快活な随筆と『朝食テーブルの独裁者』(1858)で最も良く知られる「朝食テーブルもの」と呼ばれるエッセイによってなじみが深い。

ジェームズ・ラッセル・ローウェルは、ケンブリッジ星座の第三の小惑星として、多くの軌道を経た。彼は弁護士であり、編集者、大使、随筆家、そして詩人であった。始めは穏健な急進派、

最後は、彼の仲間を形容するにはふさわしくない陳腐な上流階級として終わった。とはいえ、ローウェルの著作は今日では、当時より、訴える力がない。『ビッグロー書簡』(第一巻, 1848; 第二巻, 1868)は意識的に北部方言で書いた二巻の諷刺詩、また彼は数巻の随筆を出しており、『我書斎の窓』(1887)と『民主主義と他の演説』(1871)が彼の洗練された精神、興味の広さ、そして穏健な信念をよく表している。

ジョン・グリーンリーフ・ホイッティア(1807-1892)。

ケンブリッジの仲間たちは都会的にチョッキを着ていた。しかし彼らからそう遠くない距離マサチューセッツ、ハイヴァヒルの片いなか朴素なジョン・グリーンリーフ・ホイッティアが住んでいた。「ミルトンが言うようなけだかい韻律を建てることが出来るような建造者ではない。」私の乗物はもっと粗末なものだ——詩の農耕具、四輪荷車にすぎない。」彼のニューイングランドの田舎の描写には感傷主義が顕著だが、『雪にとざされて』(1866)や、はるかな少年期への回顧は印刷会社に匹敵する詩の成果である。永続的な魅力がある。ホイッティアはクエーカーであり、熱心な奴隷廃止論者であり、奴隷廃止論者の立場から多くの詩を書いている。しかしながら彼の生来の優しさは卓越していた。彼の業績のなかにはよく知られた賛美歌になった詩作が含まれる。

ナサニエル・ホーソン(1804-1864)。

エマーソンと彼の仲間達の哲学にアキレス腱があるとすれば、人間の生活の一部をなしている悪の積極的な力と夜の闇に対する安易な免責にあるといえる。ニューイングランドのルネッサンスは以前のピューリタンの活力の再生を言ったが、罪と呵責にふさわしい力点を置いたナサニエル・ホーソンの著作によって完成した。長いピューリタンの家系の中で何がこのセーラムの申し子を個人的に苦しめていたのかは定かではないが、若い時代、またボウドン・カレッジ卒業後も、長い隠遁の時期も、彼はニューイングランドの歴史を紙面に残すことに傾注した。そこから彼は悪の力に巻き込まれた登場人物たちの道徳的問題を扱った歴史物語を組み立てた。『トワイス・トールド・テイルズ』(1837)は、そのような問題で詰まっている。コンコードで書かれた『旧牧師館の苔』(1846)は彼の結婚後の幸せな随筆を含むが、同じく道徳的問題を取り扱ったものである。

ホーソンの初めての成功作、『緋文字』(1850)は、罪のそれに拘る人々への道徳的影響を述べたものであり、『七破風の座敷』(1851)では今日的な設定の中での悪の遺伝的影響を述べ、最後の小説『大理石の牧神』(1860)は彼のローマでの生活から引き出され、罪の問題をさらに深めて、悪と墮落する文化とのかかわりにおいては単なる傍観者でしかないまじめな登場人物の問題にして取り扱っている。卓越した名文家として、批評的に時代の代表者として認識され、ホーソンは登場人物たちの心理状態を表すのに象徴的手法を駆使した。この登場人物たちの状況と彼らの感情の混交は彼の特徴的手法となり、後世ヘンリー・ジェイムズなどの作家に影響を及ぼした。

メルヴィル、ディキンソン、とホイットマン、
 ハーマン・メルヴィル(1819-1891)

ハーマン・メルヴィルは人間の宇宙の謎への悲劇的挑戦の叙事詩『白鯨』(1851)という傑作を出版した時、それをホーソンに献じた。それは彼らの短期間の交友への気まぐれな贈り物では決してなかった。共に人間の心の暗澹さを知っており、各々巧みに混交するシンボルを通して独自のテーマを表している。メルヴィルはホーソンの『Moses』から学んだ。メルヴィルの初期の名声は、『タイプー』(1846)や『オムー』(1847)など彼がしばらく野蛮人と住んだマーケイサスの実体験の説話、『レッドバーン』(1849)や『ホワイト・ジャケット』(1850)などの、彼自身の海での体験によって得られた。定期船、軍艦での生活描写は、リチャード・ヘンリー・ディナの『水平夫の二年間』(1840)の成功により影響されたのは事実だが、立ち直りの為に参加した乗務員としての心理的距離がディナにはあるのに対して、メルヴィルの作品には、本物の船乗りの深い知識がある。

『白鯨』において、メルヴィルは、アメリカがまだ知らない偉大な小説を試みた。「世界はその航路を行く船だ」とその本は語っている。そして人種・国籍を織り交ぜ、旧約聖書の邪悪な王の名からとったエイハブ船長に率いられた。奇妙な乗船員たちの乗るピークオッド号は、彼の知る世界の縮図であった。小説は鯨捕りの雄叫びで満ち、ともなる小世界を犠牲にしてまでも、無くした片足の復讐の執念に満ちたエイハブの白鯨追跡の興奮で章を重ねていく。老年期に書かれた最後の作品『ビリー・バッド』(1924年出版)は、法を順守するために船長にとって処刑される若い、キリストに似た船員の、義務に対する従順の物語である。しかしビリーのキリストのような死の受容は、あからさまな不正に陥った時にいかに死を迎えるべきかを船長に教えた。これは『白鯨』に継ぐ彼の傑作である。

『マーディ』(1849)や『ピエール』(1852)のような突飛な小説や彼の冷笑的な『詐欺師』(1857)など、『白鯨』もそうであるが、聴衆を満足させることがなかったばかりでなく、さらに奇妙なことには、それに失敗したと言える。世界的な彼の小説家としての名声は1920年になってようやく現れてきたのである。そして、その業績には、わずかに記憶に残るものとして彼の後の著作の局面である詩人としての名声が徐々に加わっていった。

エミリー・ディキンソン(1830-1886)。

文学的困習を撃ち破り、作家として独自の金字塔を打ち立てたことが、メルヴィルの著作の最大の功績であった。同様に、ずっと小規模ではあるが、エミリー・ディキンソンはその省略的で扇情的詩において、非常に個人的で革新的な個性を間違いなく位置づけた。メルヴィルと同じく、非伝統的なために名声を得るまでには時を要した。しかし彼女は、エドワード・テイラーと同じくきわめて隠遁的で、存命中に五編の詩を出版したのみで、創作そのものを愛した詩人であった。

彼女の父親の郷里はマッサチューセッツ州アマーストは彼女がひっそりと生活し、自ら「世界への手紙」と呼んだ千以上の詩を作った彼女の修道院のような隠遁所であった。彼女の詩集の第一巻は、彼女の死後、ようやく1890年に出版された。「私は鷓鴣のように小さい」と友人に書いている。「私の髪は剥げ、栗のイガイガのよう、私の目は客の残したグラスの中のシェリー酒のよう。」彼女はソーローのような気まぐれな頑固さを生来もっていたが、それを詩的本能の確かな火にくべて強固にした。彼女の詩には異常なもののみでなく、日常的なものへも一風変わった目を注いでいる。それが読者を揺さぶり、その詩に緊張を与えるため、文法的語句配列を中略するという手法をとらせた。傾斜した押韻、時には無韻、奇妙な並列などが彼女の作品を個性化した。しかしながら、彼女のイメージは鋭く、鮮明なものであった。とりわけ、なにごとにも詩にすることを妨げるもののない感性を彼女は持ち合わせていた。

ウォルト・ホイットマン(1819-1892)。

1855年にはロングフェローの『ハイアワサ』と、ウォルト・ホイットマンの『草の葉』の初版本が出版された。ロングフェローの叙事詩は、多くの本よりの抜粋をフィンランドの『カーリヴァーラ』を詩的モデルとし、主人公をアメリカインディアンのしゅう長としたものである。アメリカは『ハイアワサ』に目を留め、教科書に取り入れた。一方『草の葉』は無視され、ホイットマン証言によれば、原稿が火に投じられた始末であった。エマーソンだけは別であった。彼はホイットマンにこう書き送っている。「私はあなたの偉大な経歴の出発を歓迎します。このようなスタートを切られるにはよほどの前歴がおありなのでしょう。」その出発は遙か普遍的にホイットマンに先立ってアメリカが長い間神聖な使命として抱き続けた信念の一部であった。ホイットマンはエマーソンの「自己信頼」の原則と、神聖さはどこにでも見いだせるという確信の直系であった。最も卑近な(偏在する、実利の、そしてすがすがしく美しい)日常的行為として草取りをしながら、ホイットマンはあたかも草を繁殖させるように詩作した。というのは、『草の葉』が彼の詩の集大成となるまで生涯それに書き加え続けたからである。ある意味においてホイットマンは総てを抱合する包括的なエゴを称えと言い、それゆえに、逆説的に最も謙そんな行為とすることができる。そのような意味では、人は、その中にある自己を軽視せずに、なにものをも、軽視することはできないのである。ホイットマンは言っている。「私は専らアメリカと今日に関して、歌っているのであり、削除したり、付け加えたりもしている。」彼は勿論自分自身についてもそうであると言っているのである。自由・で軽快で、高度な韻律をふんだ彼の全集は、彼の感性と彼のアメリカ感からくる包括的な統合力によってまとめられている。どの詩も全体との関連の中で意味をなしている。

しかしながらホイットマンの後期の詩は、特に、自身が生涯後遺症を背負いこむまでに無償で負傷者の看護にあたった南北戦争の衝撃の後には、自由で、エネルギッシュな詩においても野性的な金切り声がやわらぎを見せた。リンカーンの死に際して献じた『遅咲きのライラックが門辺に

咲く時に』(1866)は、『自己の歌』(1855という途方もない横溢な詩、また今日よりもさらに驚きをよんだ性的エネルギーの賛歌の詩の後には、柔軟で適切な次作であった。『インドへの道』(1871)では、彼は地球のすみが運河、鉄道、やケーブルで結ばれることを歌い、アメリカを目に見えない魂の政府のもとでの宇宙的、精神的表象にまで意味づけている。ホイットマンの詩によって、独立以来のアメリカ文学史に新たなページが刻まれた。ホイットマンはアメリカ文学が自立しつつ、人類の同胞性を認識するために貢献した。

南部の著作

一般的に言って、南部にとって19世紀は文学的に停滞期であった。むしろ南部はまだ自らの文学的資産を利用することを学んでいなかったというほうが適切であろう。ウィリアム・ギルモア・シムズ(1806-1870)は、南部のインディアンや、独立戦争時の植民地とイギリス軍の国境戦争を題材にした歴史小説で最もその資産に近づいたと言える。『エマシー族』(1835)は彼の傑作のひとつである。オーガスタス・ボールドウィン・ロングストリート(1790-1870)は「ジョージア風最」(1835)で、まだ活気を止めている南都の州の「風俗、習慣、娯楽、機知、そして方言」に一瞥を与えた、南部の作家たちにとって、南北戦争の衝撃は経済に与えた影響同様、破壊的であった。シドニー・ラニア(1842-1881)は友人に書いている。「戦後の我々南部の若者たちの生活感情は生ける屍といったものだ。」そのような感情がヘンリー・ティムロッド(1828-1867)、ポール・ハミルトン・ヘイル(1830-1886)、そしてラニア自身の詩に反映されている。初めの二人の詩は衰退した今を回顧した詩である。最も成功したのは、結核にかかって世を去る前のシドニー・ラニアである。詩人であるとともに、プロの音楽家でもある彼は、詩を「音の現象」と見て『英詩研究』(1880)において音譜の韻律分析をおこなったが、それは20世紀の詩人たちのアクセントの刷新の下準備となった。『交響曲』(1877)や『沼の賛歌』(1884)はよく知られたものであるが、『ハミシュの復讐』(1884)や彼の死後出された、ある種の実験的で断片的な詩は彼の作品中最も興味あるものである。

概して南部は失われた植民地の陰に安住していた。ジョージ・ワシントン・ケイブル(1844-1925)は愉快的な地方色のある物語を書き、『なつかしきクレオール時代』(1879)として、また『グランディシム家。』(1880)にまとめ、またルイジアナの風景を扱ったりもした。ジョエル・チャンドラー・ハリス(1848-1908)の『アンクル・リーマス：その歌と格言』(1881)も過去の回想物で、民話のかたちをとっている、これは無数の大衆小説で南部の歴史をたいさんぼくで飾ったトマス・ベイジ・ネルソン(1853-1922)の感傷主義よりも堅固な論拠であった。

マーク・トウェインと西部

西部の幕開けと開拓地への移住の歴史は、特に外国人による旅物語を除いて、西部の文学を創作するための猶予を与えなかった。開拓地の人々はお互いに語り合う「ほら話」や、誇張した武

勇伝や、独特のきわどい言い回しの粗野な機知などに創造力のはげぐちを自ら見つけた。『デビッド・クロケット陸軍大佐のスケッチと奇行』(1833)は、作者不詳であるが、デエビッド・クロケットの素晴らしき探検へのスタートをきらせた。ジョージ・ワシントン・ハリス(1814-1869)による『サット・ラヴィングッドの長物語』(1867)は、「コーンリカー」に飢えて言葉は精力的なグレートスモーキーからのよろよろした足どりの登山者の途方もない独り言を表現する文学的用語に熟達している。マーク・トウェインはサンフランシスコ新聞で批評したが、ハリスの業績とマーク・トウェインを有名にしたものとの差は紙一重であった。

ペンネームを、水深測量の時のミシシッピの水先案内人の掛声からとったといわれるマーク・トウェインはミズーリ州、フロリダで生まれ、四才の時に、ミシシッピの川辺ハンニバルに移った。『カラヴェラス郡の有名な跳び蛙』(1865)で一夜にして有名になる前には、彼は印刷工、水先案内人、坑夫、新聞記者などをして、ミシシッピからカリフォルニアまでさまよっていた。東部に落ちてから、『赤毛布外遊記』(1869)の中で、アーヴィングが世紀の始めに魅せられたヨーロッパの遺物を声高に揶揄している。民衆は彼に注目した『西部旅行奇談』(1872)はネヴァダでの坑夫生活を描いたもので、坑夫生活を描いた最上のものである。『ミシシッピの生活』(1883)はより回顧的で水先案内人としての彼の経歴にふれずにはいられないものであった。

『トム・ソーヤーの冒険』(1867)とおなじ登場人物を用い、その続編となった『ハックルベリー・フィンの冒険』(1884)において、時にマーク・トウェインはアメリカ最大の小説を書いたといわれる。ハックの逃亡黒人と共に、筏でのミシシッピの川下りは、川辺の生活という新しいシリーズを生み、様々な型で古典となった。しかしながら、ハックの逃亡の裏にはいわゆる「文明」というものの冷酷で、ひどく抑圧的な暴力に対する抵抗という深刻な主題がある。ついに自由になった、黒人と共に、「僕は他の連中よりも先きに土人部落に出かけなければならないと思う。サリーおばさんが僕を養子にして、人並みの人間にしようとしているからだ。そして、僕はそんな辛抱は出来ないからだ。前にもう経験済みである。僕は眼前に広がる光へと出て行く。サリーおばさんは僕を養子にし型にはめようとしている。ずっとそうだった。もう耐えられない」という。時代の進歩に対する嫌悪感はクレメンツの辛辣さと共に増大していった。そしてそれを当時彼を最も人気ある作家にした機知で覆い隠した。彼の深まりゆく悲観主義は『ハドリーバーグを墮落させた男』(1900)や、『不思議なよそ者』(1916)などに結実している。『ハックルベリーフィン』はこれらの後期の作品と異なり、批判を登場人物の快活な会話で覆っているが、登場人物たちが本の代弁者ではなく、人間として語るの、おそらくアメリカ文学の中では初めてのことだろう。クレメンツはホイットマンが現代詩を解放したと同様の功績をアメリカ散文においてなした。

開拓の題材を用いたのは開拓民に向けたものではなかった。東部の消費世界に向けたものであり、次第にその効果を見た。このことはクレメンツのみでなくもう一人の西部の探索者ブレット・ハート(1836-1902)についても同様であった。『正直者ジェームズの気取らぬ言葉』(別名『Heathen Chinee』)のような詩や、『ポーカー・フラットのならず者たち』(1869と1870)といった感傷的

な物語は国内外において彼を有名にした。ハートも独自の影響を与えた。インドで編集をしていた時、ルドヤード・キプリングは自問した。「生きた国産の小説を補うのになぜ、ブレット・ハートを買うのか。実際買ってしまったのだ」と。結果はキプリングの『高原平話』(1888)である。

他のユーモア作家たち

マーク・トウェインは伝統を越え、他のライバルたちよりも抜きん出たが中西部の伝統に属する西部のユーモア作家であった。彼同様殆どがコミック記事で新聞紙面を賑わすジャーナリストであった。彼らもペンネームを用い、後に講演の演台に向かうことになる。彼らの呼び物、度重なる誤字、政治や現代に対する歪んだ批評は教養のない者を知識人や中層階級の人々にもアピールした。彼らの芸術はオリバー・ウェンデル・ホームズの『朝の食車の専制君主』の愛国的ユーモアや、ジェイムズ・ラッセル・ロウエルの『ビッグロー・ベイパーズ』ほら話のような作風などの研究がなされ、それがアメリカを表すにふさわしいアメリカ文学の喜劇的要素とされた。

元来東部出身のものもいた。「ウォード・アーティマス」として、幅広い支持を得ていたチャールズ・ファーラー・ブラウン(1834-1867)：「ペトリアム・V・ナズビー」という名で執筆したデビッド・ロス・ロック(1833-1888)；「ジョシュ・ビリングス」になったヘンリー・フィラー・ショー(1818-1885)。アーティマス・ウォードはメインに生まれたが、クリーヴランドの『ブレインディラー』の投稿家として仕事を始めた。『アーティマス・ウォード：その書物』(1864)で名を馳せた。エイブラハム・リンカーンは彼を尊敬し、マーク・トウェインは彼をまねた。ナズビーの戯画的役割は、田舎牧師としてであった、『ナズビー新聞』は広く読まれた。彼はニューヨークのヴェスタルの出身でトリードの『ブレイド』の編集を担った。マサチューセッツ生まれのジョシュ・ビリングスは、小さな新聞に寄稿する前に数多くの職業についた。『ジョシュ・ビリングス、彼の言ったこと』(1865)はナズビーやトウェインを励ましたように同じくワードの励ましで出版をみた。口語的ユーモア作家の棧敷の代表者としては、エドワード・ウィルソン・ナイ(1850-1896)がいる、彼はメインから西へ、ウインズコンシンさらにワイオミングに移ってからはビル・ナイと名乗り、ララミーの『ブーメラン』を編集し、コラムを書き『ビル・ナイとブーメラン』(1881)にまとめた。

その伝統は彼らでたえることなく、20世紀になってもフィンリー・ピーター・ダン(1867-1936)などに引き継がれた。彼は始めは『シカゴポスト』の編集長として、後に『戦争と平和とドゥーリー氏』(1898)やその他の巻にまとめられたアイルランド人の酒場の主人「ドゥーリー氏」の社会的、政治的意見で名を馳せた。ウィル・ロジャーズ(1879-1935)も忘れてならない。彼のユーモアは舞台のみならず、組み合いのニュース欄において有名になった。日常語を用いたユーモアの手法が真剣な文学にまで高まるには、第二のトウェイン、シカゴの『トリイビューン』のスポーツ記者リングラードナー(1885-1933)の出現を待たなければならなかった。彼の『おれは駆け出し投手』(1916)は野球の挑発的で痛烈なコメントであり、『短編小説の書き方』(1924)、『愛の巣』(1926)

や『ラウンドアップ』(1929)は表面上は戯画的な日常生活を描いている。

地方色文学

ホーソーンの後期の作品、特に登場人物とその背景にまつわる「素晴らしい細目」に関心が高まっていったことはリアリズムへの自然な流れとみられる。はじめは穏やかにやって来た。南北戦争の火付け役となり、19世紀のアメリカで最も人気を博した小説となった『アンクル・トムの小屋』(1852)を書いたハリエット・ビーチャー・ストウ(1811-1896)は、『オア島の真珠』(1862)や『古里の人々』(1869)などのメインの物語で地方色文学に身を転じた。この地方文学という一般的なジャンルにおける古典、セアラ・オーン・ジュエット(1849-1909)の『尖った縦の木の国』(1896)の舞台もまたメインであった。ウィラ・キャザーが『風と共に去りぬ』、『ハックルベリー・フィンの冒険』と共に後世に残る三大小説に挙げたこの小説は、一夏、自然に近く生きる村人、漁師のもとを訪れた一人の旅人によって、素朴な生活が再認識されるという牧歌である。ジュエットが描く舞台は自然が神を反映している。彼女の関心は自然と人間の内なる麗しさである。彼女は「お上品な伝統」の最良の代表である。

リアリズムと道徳的リアリズム

ウィリアム・ディーン・ハウエルズ(1837-1920)。

アメリカ小説が、独自の問題を追及すると共に、ヨーロッパの後を追うにつれ、アメリカ人が直面している身じかな問題に地方文学よりロマンチックでない場面を見だし、作家たちが言う「実人生なるものと強固に取り組み始めた。「小説の使命は日常を最上の適確さで描くことである」とハウエルズは言っている。彼は「適確さ」と「よりアメリカらしい、人生の明るい面に最大の力点を置いた。

後の作家たちは、彼を穏健すぎるとし、「口の重いリアリズム」としたが、彼の作品は、小説家の社会的存在としての人間に注視する目が、ほとんど社会学者というべき現代の歴史家であるとする概念を一步推し進めた。

『現代の生活』(1882)と『サイラス・ラパムの上昇』(1885)とにおいて、ハウエルズは彼のテーマを端的に表した。

『現代の生活』は両親も、伝統も無く、自分以外は誰にも頼らぬ男が、アメリカの上昇志向に逆った結果、言われている事と現実との格差の中で、自国の社会的、文化的構造を学ぶというものである。ハウエルズの主人公にとって結果は悲劇的であった。『サイラス・ラパムの上昇』は、精神的「向上」は経済的「墮落」を意味する新たな工業時代に生きるビジネスマンの道徳的葛藤を扱ったものである。両方の書物においてハウエルズは時代の批評をなしている、彼は多作な小説家であり、随筆家、そして批評家であった。

彼はボストンに向けて、中西部を去り、『アトランティック・マンスリー』の編集長となり、

最期には、ニューヨークで『ハーバースマガジン』のスタッフの一員となり、かくしてハウエルズは19世紀末の文学の王道の軌跡を踏んだといえる。

ヘンリー・ジェイムズ

長年、複雑に絡む実人生よりもさらに曖昧模範な散文を書く単なる審美家と見なされていたが、ヘンリー・ジェイムズは小説や批評において傑作を生み出し19世紀と20世紀の棧となったアメリカ文学の巨匠となった。ジェイムズが尊敬したハウエルズ小説と同様、ジェイムズの作品は、人生の岐路に接した登場人物たちの道徳的葛藤を扱っている。イギリス、ヨーロッパに置かれたアメリカ人の例がジェイムズが技も腕を奪うケースである。おおいに影響を受けたホーソーンと同じく、また卓越した心理学者でありプラグマティストであった弟のウィリアム・ジェイムズに励まされ、ヘンリー・ジェイムズは人が必然的に環境に対して成す心理的反応を、現実的行動の分野として最も価値を置いた。

恐ろしく感覚的なジェイムズの文体も、表現形式としてのホーソーン風シンボルの駆使は、彼の言によると「作品の道徳性を、創作している時に感じている感情から全く独立させる為」としている。芸術的道徳性はかくして「精神的上品さ」となり、かつてブライアントが規定した語義とは掛け離れたものとなり、文学は既製の、あるいは教師の教える道徳では無く、道徳性そのものとなった。ジェイムズ自身はアメリカを去って、イギリスの市民権を取るに至ったが、ジェイムズの多くの作品の中で『ある婦人の肖像』(1881)、『鳩の翼』(1902)、『使者たち』(1903)、そして『黄金色の盃』(1904)は、アメリカ人の主人公が置かれた環境の中でついに勝利を得る道徳教育の好例である。

ドラマ

世紀の終わりにはヘンリー・ジェイムズ、ハウエルズそしてマーク・トゥエインまでもが、演劇に手をつけた。彼らの背後にはアメリカの劇作家たちの長い苦闘がある。18世紀には主だったところでは、『パルティアの王子』(1767)という無韻詩の悲劇を描いたフィラデルフィアの詩人トーマス・ゴッドフリー(1736-1763)、そして1787年にニューヨークで興業されたアメリカ初のアメリカ人による喜劇『コントラスト』で記憶されるボストンの弁護士ロイヤル・タイラー(1757-1826)などがいた。

ウィリアム・ダンラップ(1766-1839)は時代物のメロドラマ『アンドレー』(1798)で演劇に国産色を出すことを推し進めた、ロバート・モンゴメリー・バート(1806-1854)は歴史的悲劇『剣闘士』(1831)と劇的悲劇『ボゴタの仲買人』(1834)を劇作家から便宜を要求することのできるアメリカの俳優のはしりとなった俳優、エドウィン・フォレストに合うように仕立てた。しかし収益は俳優にいき、劇作家たちにはこなかった。失意の内に、バートは『森の悪魔』(1837)などの小説に転向した。

真剣な劇作家にとってイギリスも似たりよつたりの状況であった。俳優が羽振りをきかせ、韻文の書齋戯曲が有能な詩人たちによって数多く書かれ、演劇は産まれなかった。アメリカにおいてはポーが、『政治家』(1835)に手をつけたが不作であった。叙情詩人ジョージ・ヘンリー・ポーカー(1823-1890)が、数編の韻文劇を書いたが、彼の最高傑作『リミニのフランチェスカ』(1855)でさえ十分な報酬をもたらさず、彼の名を劇作家として後世に留め置くことすらなかった。

英国で修行をしたアイルランド小まれの俳優兼劇作家Dion Boucicaultディーアンビューシコウ(1820-1890)は、劇場をよく知り、観客の好みも心得ているので、メロドラマで興業的成功を収めた。ビューシコウの『The Octoroon黒白混血児』(1852)は異種族混交を扱ったもので、132の彼の劇の中で長期興業をした。

と同様デイヴィッド・ベラスコ(1854-1931)は、俳優であり、劇作家、また演出家であったが、彼の舞台演出は芸術的というより、舞台の活気に負うものであった、世紀が変わっても、劇場と俳優が主流であった。演劇そのものは、未だ真の威厳を得ず、成功する劇作家は主として便利屋でしかなかった。